



 Data	2024-7
監督	松林宗恵
特撮監督	円谷英二
脚本	橋本忍/国弘威雄
出演	夏木陽介/佐藤充/上原美佐 / 鶴田浩二/加東大介/三 橋達也/小泉博/宝田明/ 池部良/小林桂樹/三船敏 郎

👁️👁️ みどころ

中学時代に“高嶺の花”で“憧れ”だった本作を、私は2014年にシネ・ヌーヴォではじめて鑑賞しその評論を書いた（『シネマ 33』未掲載）。それから約10年後、再びシネ・ヌーヴォの「橋本忍映画祭2024」で本作を鑑賞したため、約10年前に書いた本作についての（本格的な）評論を添付したうえ、74歳時点での“新たな視点”を付け加えたい。

真珠湾攻撃（奇襲）という“バクチ”で大勝ちできたのはラッキー。その後の南方作戦等々でも、連戦連勝だった連合艦隊の海軍総力は米国海軍のそれを上回っていた。それにもかかわらず、なぜミッドウェイ海戦では敗北したの？その原因説明は不可欠だ。

『切腹』（62年）でも、『八甲田山』（77年）でも、最後に描かれていた“報道管制”は、ミッドウェイ海戦についても同じ。こんな大本営だったことを考えれば、敗色濃くなった戦争末期の“フェイク報道”の酷さもうなずける。

安倍派を中心とする“裏金作り問題”の捜査が大詰めを迎えている2024年1月中旬の今、“大山鳴動して鼠一匹”の幕引きとなれば、政治不信のうえに検察不信が重なり、我が国はますます衰退し、“ドボン”の方向に進んでいくのでは・・・？

—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————

■□■「橋本忍映画祭2024」開催！■□■

私の中学時代に自宅のすぐ近くの映画館で公開され、ド派手な看板に魅了されたものの、封切館であるため観ることができなかった本作を、2014年5月31日にシネ・ヌーヴォで1度鑑賞し、その評論を書いた（『シネマ 33』未掲載）。しかし、今般シネ・ヌーヴォが「生誕百五年・没後五年 橋本忍映画祭 2024」を開催したため、『八甲田山』（77年）等と

もに再度本作を鑑賞。9年前の評論に追加して、新たな視点を付け加えたい。

■本作後半 vs 『ミッドウェイ』。日米の視点の違いは？■

戦争には勝者と敗者があるから、戦争映画は勝者側 vs 敗者側どちらの立場で描くかによってその内容が大きく変わってくる。それを実証したのが、クリント・イーストウッド監督が『硫黄島の戦い』を2部作として映画化した『父親たちの星条旗』(06年)、『シネマ12』14頁)と『硫黄島からの手紙』(06年)、『シネマ12』21頁)だった。

「ニイタカヤマノボレ」の打電に始まった1941年12月8日午前3時20分(日本時間)の、日本軍による真珠湾攻撃(奇襲)が大成功したことは、日米どちらの側から見ても明らかだ。それは、本作前半とベン・アフレックが主演していた『パール・ハーバー』(01年)、『シネマ1』10頁)を持ち出すまでもなく明らかだ。しかし、本作後半に見る「ミッドウェイ海戦」と、『十戒』(56年)や『エル・シド』(62年)でお馴染みのハリウッド俳優、チャールトン・ヘストンが主演した『ミッドウェイ』(76年)に見る「ミッドウェイ海戦」を対比すると、「硫黄島の戦い」と同じように、「ミッドウェイ海戦」についての日米の視点の違いがよくわかる。

三船敏郎は黒澤明監督作品の主演として、『七人の侍』(54年)、『蜘蛛巣城』(57年)、『隠し砦の三悪人』(58年)、『用心棒』(61年)、『椿三十郎』(62年)等の時代劇はもとより、『天国と地獄』(63年)等の現代劇でも主演を務めているが、『明治天皇と日露大戦争』(57年)、『シネマ33』未掲載)では日露戦争における東郷平八郎役を、『連合艦隊司令長官 山本五十六』(68年)では連合艦隊司令長官山本五十六役を、誰よりもピッタリと決めていた。そのため、チャールトン・ヘストンがマシュー・ガース大佐役で米海軍の主演を務めた『ミッドウェイ』でも、彼は山本五十六役を演じていた。もっとも、『ミッドウェイ』では、三船以外の日本人俳優は全員日系人俳優で編成され、セリフは三船を含めすべて英語とされていた。また、私は同作を劇場ではなく、TV放映版で観たが、それはすべて日本語に吹き替えられていた。そのため、私は日本語吹き替えのTV版『ミッドウェイ』を大きな違和感を持ちながら観たが、それ以外にも『ミッドウェイ』には本作のシーンがたくさん使用されていることを、2度目の本作鑑賞で確認することができた。

それをさらにウィキペディアで確認すると、①零式艦上戦闘機をはじめとした随所にある各艦上機の空母発艦シーン、および、ミッドウェイ島攻撃で車両が炎上したり米兵が対空砲を撃ったり吹き飛ばされたりするシーンなどは20世紀フォックスの『トラ・トラ・トラ!』から、②日本海軍・艦隊の洋上シーンや、空母赤城・飛龍の甲板上シーンや格納庫の炎上シーン、漁民たちからの見送りをうけるシーンなど、日本軍に関するシーンでは東宝製作の日本映画『ハワイ・ミッドウェイ大海空戦 太平洋の嵐』などから多くが使用されたとのことだ。こんなケースは極めて珍しいが、これはまさに映画が描く対象が「ミッドウェイ海戦」なればこそ起きた現象だ。

他方、興味深いのは「ミッドウェイ海戦」では、第一航空戦隊の空母「赤城」、「加賀」、

そして第二航空戦隊の空母「蒼龍」は米空母「エンタープライズ」から発進した急降下爆撃機の急降下爆撃によって炎上、戦闘不可能となったため、その後は唯一生き残った第二航空戦隊空母「飛龍」に乗る山口多聞司令官が戦闘指揮を執ることになった。そのため、本作では山本五十六役は藤田進に譲り（任せ）、三船敏郎は山口多聞役で登場している。また、主演も三船敏郎ではなく、空母「飛龍」の艦上機（爆撃機）に機長の友成大尉（鶴田浩二）と共に乗る北見中尉役を演じた若手俳優、夏木陽介に譲っているの、それにも注目！

■□■円谷英二特技監督の特撮は？プール撮影をどう見る？■□■

山田洋次監督、渥美清主演の『男はつらいよ』シリーズは計 50 作も作られたが、日本では『ゴジラ』シリーズも、最新の『ゴジラ-1.0』(23 年) が 30 作目となっている。同作では山崎貴監督の特撮が注目されたが、円谷英二は特撮監督としてそれ以上に有名。そして、『ゴジラ』シリーズや戦争大作シリーズをはじめとする数多くの作品の特技監督として、その役割を果たしてきた。

また、ウィキペディアには、本作の特撮について次の通り書かれている。すなわち、

戦闘シーンの特撮は、『ハワイ・マレー沖海戦』や『ゴジラ』で実績のある円谷英二が担当している。真珠湾攻撃の一連の特撮シーンは、『ハワイ・マレー沖海戦』と同じ構図のものもあり、円谷自身による『ハワイ・マレー沖海戦』のカラー・リメイクとなっている。

東宝は本作品のため、約 1,500 万円を投じスタジオ内に総面積約 1 万平方メートルもの特撮用大プールを建設し、完成披露の際は出演者総出による記念式典まで行うほど注力した。

設計は美術助手の井上泰幸が手掛け、イタリアの撮影所チネチッタのプールを参考としている。当初井上は、周辺の土地を買収する想定で撮影所の敷地をはみ出す広さのものを設計したが、会社から反対され、真珠湾のミニチュアを縮小することになったという。この施設をフル活用して撮影された真珠湾攻撃やミッドウェイ海戦などのシーンは、この時代の技術力として一級品であり、のちの東宝映画『連合艦隊司令長官 山本五十六』や『連合艦隊』などにも流用されている。

本作を見ていると、この解説がよく理解できる。ただし、本作を含め、何度も「ミッドウェイ海戦」をテーマとした映画を観てきた私は、目が肥えてきたせいか、今回はプールを使った特撮であることが少し目につくことに・・・。

■□■艦が沈むときは艦長も運命を共に！そんな悪習はダメ！■□■

「ミッドウェイ海戦」では日本の主力空母 4 隻が沈没した。しかし、痛手は空母で編成された機動部隊のみで、山本五十六率いる戦艦大和を旗艦とする連合艦隊自体は“作戦中止”によって無傷で帰還した。軍隊は、そして司令官や将兵は戦いの勝利のために全力を傾注するが、その勝敗は“時の運”。長い戦いの歴史の中でそんな教訓(?) が形成されているはずだが、日本海軍においては、軍艦が沈む時は艦長や司令官は同艦と運命を共にす

るという習慣（悪習）がある。

それがいつ始まったのか私は知らないが、「飛龍」の加来艦長（田崎潤）と、第二航空戦隊の空母「飛龍」に乗る山口司令官が、「総員退去」の命令が下された後、「飛龍」と運命を共にする姿を見ると、そのバカバカしさを痛感することに。なぜなら、もちろん軍艦の損失は大きい、それ以上に優秀な人材の損失も大きいからだ。海軍兵学校を卒業して少尉に任官した後、少佐、中佐、大佐となり、少将、中将、大将まで登っていく人材は、何よりも貴重なはずだ。しかるに、艦が沈む時に艦長や司令官は運命を共にすべし、とは何ともバカバカしい悪習だ！

■□報道管制もこの時から！ラストは松林監督に拍手！■□

ウィキペディアの作品解説には、次のとおり書かれている。すなわち、

戦争の悲惨さを訴える部分もあるが、松林宗恵の独特の戦争観が伝わる。特に飛龍が沈没した後、山口司令官と加来艦長が、海底に沈んだ飛龍の艦橋内で幽霊のように出てくるシーンがあり、主演の夏木陽介はこのシーンが松林の一番言いたいテーマであったと評している。

私はこれに同感。このシーンは、さすが松林監督なればこそそのものだ。

私が松林監督ならではの演出だと拍手したいのは、ミッドウェイ海戦の敗北が明らかであるにもかかわらず、大本営がこれを隠し、偽りの情報を流したうえ、北見中尉らミッドウェイ海戦からの帰還兵を一時隔離したうえ、南方作戦に派遣した（追いやった）ことへの批判を明確に示したことだ。2022年2月24日に始まったロシアによるウクライナ侵攻（戦争）については、今の日本では、連日さまざまなニュースで、できる限り正確な情報を伝えようとされている。これは2024年1月1日に起きた能登半島地震の情報も同じで、今や都合の悪い情報を意図的に隠して報道しようとする報道機関は存在しないし、そのような報道規制をしようとする国家権力も存在しない。しかし、ロシアでは？また、中国では？そして、北朝鮮では？

そんな視点で、本作ラストで北見中尉が語るナレーションを聞いていると、80年前の日本（の大本営）は今のロシアや中国、そして北朝鮮と同じ・・・？

2024（令和6）年1月18日記



Data

監督：松林宗恵

出演：夏木陽介／佐藤充／鶴田浩二
 平田昭彦／池部良／田崎潤／三船敏郎／藤田進／宝田明／小林桂樹／三橋達也
 加東大介／上原謙／河津清三郎／上原美佐／三益愛子

👁️👁️ みどころ

故松林宗恵監督の『連合艦隊』（81年）は名作だったが、それより21年前に同監督が、真珠湾奇襲からミッドウェイ作戦まで6カ月間の「連合艦隊」の「活躍」を、ある飛行士の視点からイキキと。

南方作戦とは？ミッドウェイ作戦とは？そして、連戦連勝の連合艦隊はなぜ敗北したの？

「これが戦争だよ」。そんなセリフを反芻しながら本作を鑑賞し、今の時代の生き方を考える一助としたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■追悼！松林宗恵監督！■□■

人生にはいろいろな出会いがある。弁護士家業を40年もやっていると、法曹界だけではなく、実業界、マスコミ、映画界、音楽界、落語界等々、人の縁を通じて時として著名人と直接知り合い（単なる名刺交換？）になることもある。2009年8月15日に満89歳で亡くなった松林監督もその一人だ。ある人が主催する著名人の集まるゴルフコンペではじめてお会いした時、その名前を聞いて、「えっ、あの映画監督？」と思った分だけ偉いものだ。

中井貴一のデビュー作となった『連合艦隊』は1981年公開だから、私が弁護士として独立後、最も忙しく活動していた時期。したがって、公開時に劇場で観た記憶はないが、その後のTV放映で何度も観たから、その内容はよく知っている。また、カラオケ大好き人間の私にとって、谷村新司が歌う『群青』という『連合艦隊』の主題曲は、ちょっと長すぎるため歌うと大体嫌がられるものの、私のスタンダードナンバーになっている。ちな

みに、2014年2月18日以降、デアゴスティーニ・ジャパンは「東宝・新東宝 戦争映画 DVDコレクション」と題して全30作のラインナップを発表したが、その第1作目がこの『連合艦隊』だ。1作目は990円という特別価格になっていることもあって私はすぐに購入し、60インチのTVで鑑賞したが、そりゃいいものだった。とりわけ、海辺に立った森繁久彌が死亡した息子をしのんでいる最後のシーンで流れる主題歌は、最大のボリュームにして聞いていると思わず涙が・・・。

その松林監督が1960年に監督したのが本作だ。松林監督には、本作と『連合艦隊』の他、『人間魚雷回天』(55年)、『潜水艦イー57降伏せず』(59年)、『太平洋の翼』(63年)もあるが、やはり『連合艦隊』が彼の戦争映画の集大成だ。

■本作が描くのは、開戦からの6カ月間■

東宝は1967年から1971年まで①『日本のいちばん長い日』(67年)、②『連合艦隊司令長官 山本五十六』(68年)、③『日本海大海戦』(69年)、④『激動の昭和史 軍閥』(70年)、⑤『激動の昭和史 沖繩決戦』(71年)と「8・15シリーズ」を続けたが、残念ながらそれ以上は続かなかった。しかして、その後10年を経過した時点での、再度の「戦争大作」の企画が『連合艦隊』で実現した。『連合艦隊』というタイトルにしたため、そこで描かれる日本海軍の戦いは①ハワイ、②珊瑚海、③ミッドウェイ、④マリアナ沖、⑤台湾沖、⑥レイテ、⑦坊の岬沖と多岐にわたっている。もっとも、①ハワイ奇襲、②ミッドウェイ戦は、本作を含むかつての戦争映画の流用カットが散見される等、多少手を抜き(?)、メインは⑥レイテ沖と⑦大和特攻作戦とされている。2時間の映画ですべての海戦を描くことができないのは当然だから、そんな構成はやむをえない。

そんな『連合艦隊』に対して、本作が描くのは、①真珠湾奇襲作戦の成功から、②南方作戦の展開、そして③ミッドウェイ海戦での敗北までの約6カ月間だ。真珠湾奇襲作戦の成功後、連合艦隊が「南方作戦」に従事したのは、艦隊の運用に不可欠な石油を入手するためであることが本作を見ればよくわかるが、なぜ連戦連勝だった連合艦隊はミッドウェイ海戦で敗北したの?そこらあたりの(つらい)現実を本作からしっかりと学びたい。

■あちらが兵学校のエリートなら、こちらは?■

『連合艦隊』の主演は、いかにも初々しい中井貴一扮する小田切正人と永島敏行扮する本郷英一。彼らは海軍兵学校を卒業したエリート軍人だが、松林監督は、小田切正人については、兵曹長で戦艦「大和」に乗船する父・小田切武市(財津一郎)とのつながりを、英一については婚約者の陽子(古手川祐子)との結婚、兄に続いて兵学校を目指す弟の眞二(金田賢一)とのつながりを描いた。そして、そのことが、『連合艦隊』を単なる戦争映画とは大きく異なるものとしていた。その意味では、英一の父親を演じた森繁久彌も含めて、松林監督は「現在の日本の繁栄は無名の英霊達の犠牲の上に成り立っているのではな

いか、息子達を戦場に送り出した父母の思いは如何だったのか？」との想いを、色濃く『連合艦隊』に反映させている。

それに対して、同じ松林監督がその21年前に作った本作の主人公は、空母「飛龍」の艦載機、九七式艦上攻撃機に乗る飛行士・北見中尉（夏木陽介）だ。九七式艦上攻撃機は3人乗り。機長の友成大尉（鶴田浩二）とタイミングをあわせて、魚雷や爆弾を投下するのが主な任務だ。同じ「飛龍」に乗る北見中尉の友人・松浦中尉（佐藤充）と共に、『連合艦隊』に見るエリート軍人に比べると陽気そのもので、何事もイケイケドンドンの雰囲気がある。

もっとも、『連合艦隊』の小田切や本郷と同じように、本作の北見も東北の田舎出身で、母一人だけの手によって息子を兵学校に入れたのだから大変だ。北見はその故郷に住む啓子（上原美佐）との結婚が秒読みだが、いつ死ぬかもしれない飛行機乗りの身では、素直に結婚に踏み切れないのが悩ましい。しかし、南方作戦の帰路、機上で友成大尉に相談すると、結論は意外にあっけなく……。

ここでよく考えてみると、『連合艦隊』に見る小田切と本郷も、本作に見る北見も共に20～25歳くらいの若者。要するに、今ドキの大学生や法科大学院生たちと同じ年頃だ。しかして、あの時代、彼らはそこまで考え、そこまで勉強し、そこまで行動していたのに……。

■□■南方作戦の意味は？ミッドウェイ作戦の意味は？■□■

ハワイ真珠湾への先制奇襲攻撃は連合艦隊司令長官・山本五十六（藤田進）が固執した作戦だったが、本作ではそこに見る華々しい大戦果の後、連合艦隊の主力空母が「南方作戦」に従事する様子が要領よく説明されていく。そして、真珠湾奇襲から約半年後の6月5日のミッドウェイ作戦に移るわけだが、さてそのテーマはナニ？

山本長官にしても、本作で重要な役割を担う第二航空戦隊を率いる山口多聞司令官（三船敏郎）にしても、真珠湾で米戦艦はたたいたものの、空母群がいなかったことが気がかりだった。そこで、これをたたくためには、ミッドウェイ島への上陸作戦を決行することによって、空母群をおびき出し、これを一気に殲滅する作戦が不可欠だったわけだ。

ミッドウェイ作戦に動員された日本海軍の総力は、それまでの海戦史に類を見ないものだったが、開戦以来半年間も連戦連勝が続く中、やはりどこか気が緩んでいたのでは……？南方作戦の狙いは石油の確保。山本長官との打ち合わせの中でそれを確認し、いよいよアメリカ空母たたきとミッドウェイ島の制圧というミッドウェイ作戦に移ったわけだが、よく考えてみれば、これは二兎を追うことになるのでは……？

■□■失敗の原因は？山口多聞司令官に注目！■□■

『永遠の0』（13年）は戦争映画としては異例の長期上映となったうえ、約86億円という予想以上の興行収入を挙げたのは喜ばしい限り。他方、「日米開戦70周年」を記念し

て作られた『聯合艦隊司令長官山本五十六』（11年）（『シネマルーム28』91頁参照）の興行収入は、15億3000万円だった。『永遠の0』では、何としても生き延びたいといつも主張しているゼロ戦乗りの宮部久蔵（岡田准一）が、「ミッドウェイ作戦」における雷装→爆装→再度の雷装に猛反対していたが、一介のゼロ戦搭乗員にすぎない宮部にそんな発言をする権限などない事は『シネマルーム31』134頁で指摘したとおりだ。

ミッドウェイ海戦の展開において、『聯合艦隊司令長官 山本五十六』でも、飛龍・蒼龍という2隻の空母を中心とした第二航空戦隊を率いる阿部寛扮する山口多聞司令官がいい役割を演じていたが、本作でその役割を演じたのが三船敏郎。したがって、本作における三船敏郎+飛龍の加来艦長を演じた田崎潤と、『聯合艦隊司令長官 山本五十六』における阿部寛と飛龍艦長のコンビをしっかりと比較したい。他方、赤城・加賀という2隻の空母を中心とした第一航空戦隊の司令官兼第一航空艦隊司令長官の南雲忠一や、草鹿参謀長らのバカさ加減に『聯合艦隊司令長官 山本五十六』ではうんざりだったが、さて、本作ではその点を松林監督はいかに描いているの？

■これが戦争！これを機にDVD全号申し込みを！■

真珠湾奇襲攻撃の時は敵の反撃はほとんどなく、被害も微少。それは南方作戦でもほぼ同じだった。しかし、ミッドウェイ作戦ではミッドウェイ島の軍事施設をたたくべく、友成機長と共に九七式艦上攻撃機に乗った北見中尉は、地上からの火砲の量にビックリ。また敵戦闘機の反撃もこれまでにないものだった。そこで、友成が打電したのが「第二次攻撃の要ありと認む」だったが、空母赤城に乗る南雲司令長官はこれをどう判断？ミッドウェイ作戦では「敵空母がどこにいるか？」が最大のポイントだったが、その発見が少し遅れたことが致命的欠陥だったし、敵空母発見の報告を受けた後の南雲司令長官の判断ミスがミッドウェイ作戦失敗という結果を招くことになったわけだ。

北見中尉の乗った九七式艦上攻撃機も右翼に被弾していたが、再度魚雷を積んで敵空母に向かうくらいは問題なし。そう思って準備していたが、友成機長を失い、松浦中尉を失い、あげくの果ては赤城、加賀、蒼龍の他、飛龍までも失い、自らは海中を泳いで駆逐艦に救助される結果になろうとは・・・？友成機長はよく「これが戦争だよ」と言っていたが、まさにそんな現実が北見中尉の目の前に広がったわけだ。しかして今、北見中尉はあの時の戦友たちと共に病院の中にいたが、以降の大本営の情報操作方針に沿ったミッドウェイの生き残りたちの処遇は・・・？

本作の鑑賞を契機として創刊号だけ購入していたデアゴスティーニ・ジャパンの「東宝・新東宝 戦争映画 DVDコレクション」全号を購入することにしたので、ヒマを見つけて片っ端から鑑賞しなければ・・・。

2014（平成26）年6月4日記